

書 評

山田晶詠・アウグスティヌス『告白』

中央公論社，世界の名著14，昭和43年9月

泉 治 典

このたび『告白』の新訳が山田氏の多年の御努力と御苦心の結果刊行されるにいたったことを、同学の者として心から喜び、かつ謝意を表明したいと思う。個々の訳語の厳正さと註釈の適切さに加えて、訳者が『告白』の意味を内側から深く汲みとり、見事な日本語に移されたことは、ただ驚嘆あるのみである。さらに『告白』を中心にして纏めあげられた解説は、アウグスティヌスを真に現代に生きる者として捉えているが、それは同時に訳者自身の傾倒と熱愛を生き生きと伝える筆致である。

『告白』は、「神の御前で人々に向かって」(V, 3, 3) なされた語りかけである。それは他人に向かっての告白と勧めであり、ときにはマニ教徒に対する攻撃ともなる。だがときには他人でなく自己に向かっての告白をも含む。しかしまた、しばしばただ神にのみ向かっての讚美と悔改の祈り、嘆願、叫びであり、かつ自己の魂に対してそれをなせとの命令である。従って『告白』を訳すに当っては、何よりもまず、それがこのように多くの様態における語りかけであることを明瞭にさせなければならない。『告白』の文章は、いくつもの文や副文が重なって一般にかなり長いのであるが、訳者は全文を熟読玩味して日本語として無理なく一つにまとめ、その結果一文章全体がそれぞれの様態における語りかけをなしていることを手にとるように分らせてくれるのである。今一々の例をあげることはできないが、新訳はこの点で従来どの訳よりもはるかに巧みであり適切であって、大きな進歩をとげているということができよう。そして通常はいわゆる丁寧な話し言葉で訳されているが、訳者は一つの型にこだわらず、ときには文語をも用いて魂の激しい叫びを表現させている。例えばⅨ巻の冒頭がそうである。

おお主よ、われは汝のしもべ、汝のしもべ、汝の婢女の子なり。汝はわが

枷を断ち切りたまえり。われ讚美のいけにえを、汝にささげん。わが心、わが舌よ、主を讚えよ。わがすべての骨よ、語れ。「主よ、だれか汝に似たる者ありや」と。語れ。しかして汝、われに答え、わが魂にいいたまえ。「われこそは汝の救いなり」と。

ところで『告白』は、詩篇を初め聖書の多くの言葉で綴られている。それらはときには独立で引用されるが、ときにはいくつかの言葉が重層的に用いられる。だがいずれにせよ機械的な借用ではないから、『告白』をまるでモザイクのような聖句引照辞典に化す必要は毛頭ない。新訳はこの点でも非常にすぐれていると思う。いま挙げた箇所も、前半は Ps 115, 16f. の正確な写しであるが、あえて引用符の中に入れていない。これは決して技術的な事柄ではない。訳者は聖句を訳出するに当って、アウグスティヌス自身の理解を正確に捉えるべく努力し、ときにはそれを彼自身の言葉として語らせているが、けだし至当な読み方と言うべきである。いまの箇所で、「汝の婢女の子」は、ヘブライ原典では、「家付き奴隷」の意味であるが、アウグスティヌスがここで含意させているものは「モニカの子」だということが註記されている。そうするとⅨ巻がⅧ巻の末尾に直ちに続くことが非常に明らかとなり、またこの冒頭部分を括弧に入れずに彼自身の心の激しい叫びと見て、あえて文語で訳したことの至当さも明らかである。丁寧な話し言葉はとかく冗長になり勝ちであるが、新訳はこうした仕方によっても至る所で原文の躍動を正確にキャッチしているのである。

しかし『告白』における聖書の引用は、仲々難かしい問題である。Domine, quis similis tibi? (Ps 34, 10) はⅤ, Ⅷ, Ⅸの各巻冒頭に出てくるが、Ⅴでは Ps 50, 21と、またⅧとⅨでは Ps 115, 16f. と一続きになることによって、そのいわば Würmgefühl が直ちに讚美の表明となり、こうして『告白』のモチーフとなっているのである。この連結に関しても、訳者は必ずしも出典にとらわれず、それぞれの文章に応じて一続きにか、或いは分けて訳していることは正しいやり方である。ただつけ加えて申し上げれば、こうした重要な聖句に関しては、それが載っている他の巻の箇所をも註記していただけたなら、『告白』の構成を考える上一そう役立つのではないかと思う。例えば Ps 102, 3 qui sanat omnes infirmitates tuas は、前後の連関上同一の字句にはなっていないが、Ⅹ巻の始めと終り

(n.3とn.69)にあり、またⅫ巻の始め(n.11)にあってⅩ巻とⅫ巻の結合を示すものとなっていると考えられる(Ⅻ, 9, 11では、その出典箇所¹⁾の註記がない)。こうしたことは聖句以外の他の重要な語句に関してもそうで、前出箇所の指摘は全体の理解にとって非常に有効である。

ところで、出典箇所の明示が容易な場合とそうでない場合とがある。例えばⅩ, 1, 1について言えば、先の引用に続くところで、「あわれみ深く善き方にいますあなた」の句はPs 102, 8を指すと註記されている。しかし *misericors* (または *misericordia*) と *bonus* との結合は、*Confitemini Domino* に始まる詩篇(104, 105, 106, 110, 117)を指示する方がよい。これらは類型上、個人の感謝の歌でなく民族の感謝の歌であるが、*bonus* はそこでは「善い」ではなく、むしろ「正しい」「救いをほどこす」「正しくさばく」などの意味である。この句に続いて次の文章がある。「あなたは、全能の右手をもって、私の死の深さをみそなわし、心の奥底から腐敗の淵をくみつくしてくださいました。」これについては訳者の出典指示はないが、続く文章と共に、個々の言葉はいまあげた民族の感謝の歌の中に、かなり集中的に見られるものである。例えば *bonus*, *misericordia*, *dextera Domini* は 117 に、*profunditas*, *mors*, *abyssus*, *voluntas* は 106 に見られる。こうした民族の感謝の歌をこの章の背後に見ることは、『告白』にとっては決して相応しくないことではない。カッシアクムにおける共同生活を述べる第Ⅹ巻は、すでに選ばれた神の民という共同体の場所においてすべてが語られているからである。そのように考えると、「わが助け主、贖い主なるイエス・キリストよ」という呼びかけの言葉も決して見過されない意義をもって来る。問題は翻訳の範囲をこえることになるが、ここで Ps 18, 15 を出典として指示するといった従来のモザイク的な引照は余り意味をなさないと思う。

聖句の引用が一種のフィクションに起因するのではないかとと思われる箇所がいくつもあるが、とりわけ回心の最後の場面に関しては、私は285頁に註記される山田氏の考えと少し違うかもしれない。私はP.クルセルの主張を回心の本質解釈にとって余り関係ないものとは思わない。Ⅷ, 11f.は決定的な出来事を伝えているにも拘らず、体験の状況はしばしば不鮮明で、「何か言ったと思う」「こう言うように思われた」「或いは何か」といった記述が大変目立っている。それはと

くに彼の回心において著しい内面性、詩的性格を示すだろう。同時に彼は回心の出来事を教会史的伝統の中へ組入れることによって、その歴史性、客観性を表出したのではないだろうか。アントニウス伝との出会いは彼の教会史の理解にとって決定的なものであった(Ⅷ, 6, 14の終り)。tolle, lege を聖書を取って読めと解したことはそこからくるが、その他「いちじくの木」を Io 1, 48 に、「少年少女の合唱」のヴィジョンを Apoc 14, 1-4 に帰着させるクルセルの解釈は不当だとは思われない。さらにⅧ, 11, 27の Continentia に関する記述において、Epes 5, 22-27を、「あなたの汚れた地上の肢体の誘いに耳をふさぎ、殺してしまいなさい」については Col. 3, 5 を指示しうらと思う。

聖句の引用は『告白』にとって本質的に重要な問題である。新訳はこの点で従来の機械的なやり方をはるかに超えているのであるが、こまかに考えれば多くの研究問題がわれわれの間に残されていることも事実である。

用語の語義を哲学的に厳密に把握することについて、私は山田氏の論文からつねに教えられている者であるが、Ⅺ巻の面倒な時間論の中でも、ad-, in-, dis-, ex-tendere などの語義に関する詳細な註が与えられていることは、実に有難かった。例えば435頁の distendere と extendere についての註、437頁で extendere の超出的作用についての註などは実に興味深い。ただ若干疑問を述べさせていただくならば、Ⅺ, 28, 37 の attendere を「直視」と訳し、これを同20節の contuitus (直観) に対応させておられるのはどうだろうか。むしろ attendere は contuitus と区別されて、注意の持続的作用、意識の統覚作用を言うのではないだろうか。だが contuitus はまだ時間の連続作用を形成しないものである。そのことはこの二箇所の叙述からも知られるのである。これに関連して36節の cogitationem tendimus ad mensuram vocis は「思惟を緊張させて音の測定のほうにむけ」と訳されているが、「思惟(または思考、意識)を音(または声)の測定(または尺度)のほうにひろげ(または伸ばし)」と訳してもよいと思われる。その他、18, 24 の praconceptio は「未来に関する概念」と訳されているが、一般的な使用として「概念」は少し強いように思うので、「像」でよいのではないだろうか。

なお文体に関してであるが、デクレ版対訳の序文で G. Bouissou が述べ、実際そう訳しているように、散文と詩文とを分けることができれば非常に興味あるも

のとなつたかもしれない。ただし *lyrisme* にせよ *rythme* にせよ、原文はこの仏訳がしているほど鮮明ではないし、また他の箇所でもいろいろ考えられるので、これも一つの研究課題である。

以上思いつくまま雑多なことを記したが、初めに述べたように新訳から受ける『告白』の印象は実に強烈であり、また学問的にも大きな刺激を与えられる。古典の翻訳ほど労多きものは他にないが、その報いは決して少くはない。このようなすぐれた訳がどれほど多くの人の精神を富まし、学問的なレベルを上げるのに役立つかは、計り知りえないほどである。

清水正照著・アウグスティーヌス

形而上学研究

——アウグスティーヌスにおけるパウロ書翰と新プラトン主義——

387頁 東京・錦正社 1968

加 藤 武

I 方法論

著者のアウグスティーヌス研究は、九州大学および佐賀大学における長い年月の着実な厳しい歩みの結晶であり、特に、若きアウグスティーヌスの著作群への精細な省察としては、日本における最初の輝かしい光に満ちたモニュメントとして貴重な業績である。ヨーロッパにおいて、十九世紀の末葉、ハルナック、ポアシェ等によって始められた、「告白録」をカッシキアクム著作群と対比しながら、その真正性を批判的に検討し、とりわけて「新プラトン主義者であったか、カトリシヤンであったか？」の観点に立ちつつ心理的（実存的）・実証主義的な態度を以て逼る方法は、著者が特にとりあげて丹念な対決を試みておられるティムメ、ネルレガードの秀れた研究を経て、第二次大戦後はフランスのクルセル、アンリに率いられる方法において従来より一層文献学的方法を以て、ほぼ一応の結